

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350236

研究課題名(和文)ドイツのESD学校教育プログラムの成果と課題にみるESD授業の推進

研究課題名(英文)Promotion of ESD lessons through result and problem of ESD program in german school

研究代表者

竹下 浩子 (Takeshita, Hiroko)

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：00412221

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国際的にみて持続可能な開発のための教育(以下、ESDとする)に早い時期から取り組んでいる、ドイツのESD推進に向けた学校教育プログラムについて、これまでの成果と課題を考察し、我が国の学校教育においてESDの概念を取り入れた授業(以下、ESD授業とする)の推進を図ることを目的とする。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the education for sustainable development in german school, which has promoted from early time as the school education program. The results and problem of the german education for sustainable development can be promoted the concept of the education for sustainable development in japanese school.

研究分野：持続可能な開発のための教育

キーワード：持続可能な開発のための教育 ESD 持続可能な社会 ドイツの学校教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 2005年に始動した「国連ESDの10年」は、2014年秋に我が国で最終年会合が開催され、ESDは一つの区切りをむかえた。日本は、この「国連ESDの10年」を提案した当事国として、日本ユネスコ国内委員会をはじめ、文部科学省、環境省などがESDの推進を行ってきた。その努力により、学校教育においてもESDの理念を重要と捉え、ESD授業を行う教員が増えてきた。しかし、環境教育、国際理解教育、人権教育などESDに関わる諸問題は、様々な分野を多様な方法を用いてつなげ、総合的に取り組むことが重要であるため、ESD授業における学び方や教え方にはさらなる広がりが必要である。さらに今後、ESD授業に教育的価値を見つけ、発展させるためには、ESDを通して育まれる力について検証していく必要がある。

(2) ドイツでは1999年から学校教育でのESD推進プロジェクトが国家主導のもと進められ、世界的にみてもESDの先進国として位置づけることができる。これは、数多くのESD授業事例とともに、ESDにより育まれる力を明確に指標化し、ESDの教育的価値が国民に認められているからである。

(3) 日本では教員が教育現場でのESDの必要性を感じながらも、「ESDを通して子どもにどのような力が身につくのか」が不明瞭でESD授業の検証ができていない。「教員間での情報共有がなされておらず、ESDが学校全体の取り組みとして発展しにくい。」という問題点が見えてきた。

ESDで育まれるべき力は、日本国内では「確かな学力を基盤とする『生きる力』の育成」という教育理念と大きく関係している。したがって、ESDの推進は、我が国の教育の未来を指し示すものとして位置づけることができる。そこで、日本でESDをさらに発展させるために、早急にESDの教育的価値を評価指標にまとめる必要がある。

2. 研究の目的

- (1) ドイツにおけるESDの学校教育プログラムの内容と評価指標の分析
- ・ESDの学校教育プログラムの経緯と実施内容についてまとめる。
 - ・ドイツユネスコ国内委員会のまとめた活動報告書と評価指標を明らかにする。
 - ・各州で行われているESD授業を評価指標と照らし合わせる。
- (2) 日本でのESD導入に向けた授業開発と評価の検討
- ・家庭科教育等を中心として、小・中・高等学校の体系的なカリキュラムの検討を行う。
 - ・ESDの内容を含んだ授業開発と実践を通して児童・生徒の学びを分析する。

3. 研究の方法 (1) ドイツの学校教育におけるESDの事例から、学校のカリキュラムや地域連携など、学校教育におけるESDの課題について検討し、日本の学校教育での実践的なESDのカリキュラムと評価について検討する。具体的には、次の手順で明らかにする。

ESDに関するドイツの文献調査と筆者がこれまで収集したドイツの学校教育に関する文献の整理から、ドイツのESDの方向性についてまとめる。

ドイツの学校教育での実践事例の収集を行うため、初等・中等教育の学校施設、教員養成課程を有する大学施設、教員研修を実施している教育委員会および関連施設にて現地調査を行う。

ドイツの大学にてESDの研究者からの聞き取り調査を行い、学校教育におけるESDだけではなく、公教育と社会教育を包括したシティズンシップ教育の理論について把握する。

日本でのESDの導入と展開について考察し、具体的な授業内容を提案し、実践する。ESD授業を参考にして評価指標の検討を行う。

4. 研究成果

(1) ドイツの学校教育におけるESDに関する文献調査とドイツの学校教育に関する文献の整理から、ドイツの学校教育カリキュラムにおけるESDの方向性を調べた。

その結果、ドイツでは、全ての州のカリキュラムにESDに関する記述がみられ、学校教育改革の手段として、ESDが用いられていることがわかった。そのため、各州の教育省もESD推進に向けて発達段階に応じたESDの指針を作成するなどして、州ごとの特色を強めていることがわかった。

(2) ドイツの大学にて研究者からの聞き取り調査では、ベルリン自由大学のデ・ハーン教授の研究室に協力を要請し、ドイツ全体のESDの実践について、関係者への聞き取り調査を行った。その結果、持続可能な社会の構築を目指した教育「Bildung für nachhaltige Entwicklung (BNE)」の2つの国家的教育プロジェクト (BLK-Programm21, 1999-2004、Transfer-21, 2005-2010) において、ESDの概念がドイツの学校に広く浸透し、実践的取組に発展したが、実際の学校現場においては、それより以前から、教師の独自性による授業研究が伝統的に行われており、ESDが各学校や各授業で行われる素地があったことが伺える。特に、90年代から、ドイツは「開かれた学校」づくりを目指して、地域のNPO/NGO

や行政など学外の団体や個人の専門家などが頻繁に学校教育現場に入っており、これらの団体や組織とともに地域の課題に即したESDの実践的活動が行なわれていることがわかった。そこで本調査では、学校教育以外の組織と学校との連携についてさらに詳しく見るため、市民団体が自主的に取り組んでいる団体の元を訪れ、関係者から学校教育との連携について意見を聞くことができた。

(3)地域と学校の連携を密にとっていくことで、さらなるESDの展開が期待できることがわかった。そこで、フライブルク、ヴュルツブルグの地方都市を研究調査の対象として、様々な団体の主催者や関係者にインタビュー調査を行った。また、実際に学校での連携授業の様子を見学した。ドイツのESDは、国家プロジェクトとして2000年初頭から学校教育で行われており、先進的な事例もかなり多く紹介されている。しかし、ESDの概念のみが先行し、先進的な事例を活用して各教員の授業などへ取り入れて発展させることができないなどの課題が見えてきた。実際に何をどう教えればよいかなど、教育現場でESDを意識して授業を行っている教師は限られており、日本の学校教育におけるESDの認知と同様の問題を抱えていることが分かった。ESDの題材は、地球的規模の環境問題や、人権、平和などグローバルな問題について取り上げるが、課題については自分たちの生活から行動を起こすことが求められている。そのため、今度の研究展開として、日本とドイツの学校教育現場で同じESDの授業を実施したうえで、テレビ会議等を通して、両国の課題の認識や、学習者の気づきや態度、授業者の気づきなどについて意見交換をおこない、国を超えてのESDプログラムの共通点や相違点を明らかにし、学校教育におけるESDプログラムの発展を目指したい。

(4)ドイツの学校教育におけるESD授業は、新しい知に伝えるかたちで、どの学校でもESD授業が実践されており、現在は、その評価についての議論が行われていることが分かった。また、日本においては、ESDという概念が多くの学校の教員に根付いているとは言えないが、ESDの概念を持って授業を展開している事例が増えてきている。その際にも、ESDの明確な評価指標を、日本の学校の教員も欲しがっていることが分かった。今後は、教師がESDの概念を持って行われているドイツの学校でのESD授業を視察し、その内容と評価とを分析したうえで、日本への授業実践の導入の可能性と、ESDの評価指標の作成を行いたい。

(5)ESDは、地球的視野で考え、様々な課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む学びだといわれるが、実際には地球的規模で起こる問題と私たちの生活とのつ

ながりは見えにくいのが現状である。そこで、クリティカル・リアリズム(CR)の理論により、複雑で多様な現実を対象とするESDと家庭科教育との関係を整理することを試みた。なぜ、クリティカル・リアリズム(CR)により整理するかというと、クリティカル・リアリズム(CR)は抽象的な問題を扱うことを得意としており、「ESDはこれだ。」と言い切れないESDの多様性や複雑性をそのままに見ながら、ESDを意識した家庭科教育の生成プロセスが明確になると考えたからである。また、クリティカル・リアリズム(CR)は、世界は様々なものが複雑にかかわりあって階層化され、変化していくものという概念をもち、それは、ESDの根底にある、実際に見えない人間生活の構造・メカニズムや関係性をとらえるためには、様々なバイアスを掛け合せて、批判的に吟味するやり方で抽象的にみるしかない状況を踏まえているからである。そういった意味で、クリティカル・リアリズム(CR)の相対的な見方や二項対立的な見方ではなく、存在する様々な物事すべてを、なるべくそのまま見ようとする見方は、理に適っているといえる。従来の家庭科教育では、自分から他者への広がりやつながりを感じながらの家庭科の学びが生成されてきた。しかし、ESDを視点とした家庭科教育では、実際に見えている、あるいは、意識している部分だけでなく、実際には見えていない、意識していない範囲とのつながりまで感じながら家庭科の学びを感じる必要がある。教師自身が、目に見えない多種多様で複雑な現実をどういうふうに説明し、現実とどう向き合うかを考え、自分自身に問いかけることにより、表面的な理解(思い込み)から解放され、目に見えない世界とのかかわりを持つよう意識するようになる。教師が原動力となって、家庭科教育の学びを生成するこのメカニズムを、クリティカル・リアリズム(CR)により整理することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

竹下 浩子、小学校・中学校・高等学校連携でつくりあげる「つながり」のある学び、広島大学附属小学校学校教育研究会、学校教育、査読無、2017、38-41

竹下 浩子、藤田 昌子、宇都宮早智、高等学校・家庭基礎における消費者教育の展開 食品ロスの授業を通して、愛媛大学教育学部紀要、査読無、63、2016、295-303

竹下 浩子、家庭科における持続可能な開発のための教育(ESD)-チョコレート を題材とした消費者教育-、愛媛大学教育

実践総合センター紀要、査読無、(34)、2016、63-68

竹下 浩子、藤田 昌子、皆川 勝子、中矢 恵美香、大黒 智子、小・中・高連携による家庭科授業の実践：「リレー刺繍」の教材開発、愛媛大学教育学部紀要、査読無、62、2015、97-101

〔学会発表〕(計 5 件)

竹下 浩子、ESD を視点とした教師の気づき - クリティカル・リアリズムをてがかりとした家庭科教育での展開 -、日本家庭科教育学会第 59 回大会、2016 年 7 月 10 日、朱鷺メッセ(新潟県・新潟市)

竹下 浩子、ドイツの森の幼稚園 - 就学前教育を意識して -、JAILA 第 5 回全国大会、2016 年 3 月 13 日、東京理科大学葛飾キャンパス(東京都・葛飾区)

竹下 浩子、宇都宮早智、中学校・高等学校の教科書分析による消費者教育の動向、第 61 回日本家政学会中国・四国支部研究発表会、2014 年 10 月 5 日、広島女学院大学(広島県・広島市)

宇都宮早智、田頭歩佳、竹下 浩子、高校生と大学生における消費意識と行動の比較、第 61 回日本家政学会中国・四国支部研究発表会、2014 年 10 月 5 日、広島女学院大学(広島県・広島市)

竹下 浩子、消費者市民社会に対する大学生の意識調査、日本家庭科教育学会四国地区会、2014 年 8 月 2 日、愛媛大学(愛媛県・松山市)

〔図書〕(計 1 件)

竹下 浩子他、小学校家庭科の授業をつくる 理論・実践の基礎知識、学術図書出版社、2017、32-35、117-120、199-200

6. 研究組織 (1)研究代表者

竹下浩子(Takeshita Hiroko)
愛媛大学・教育学部・准教授 研究者番号：00412221

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者

加賀 恵子(KAGA KEIKO) 静岡県天竜市立天竜中学校教諭